

# 國學院大學學術情報リポジトリ「K-RAIN」

## 都としての「洛陽」：芥川龍之介「杜子春」試論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-12-15 キーワード: 芥川龍之介, 「杜子春」, 「洛陽」, 妙見信仰 作成者: 舘, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002001865">https://doi.org/10.57529/0002001865</a>

# 都としての「洛陽」

——芥川龍之介「杜子春」試論——

館 健一

## はじめに

芥川龍之介の小説「杜子春」は「赤い鳥」大正九年七月号に発表され、『夜來の花』（新潮社 大10）、『芋粥』（春陽堂 大11）などに収められた。主な原典となった唐代の伝奇小説「杜子春伝」は『続玄怪録』（李復言）の中の一編で、現在のところ『帝国文学』七巻四く六号にかけて掲載された久保天随訳に拠ったものと推定されているが、これに類する話は江戸時代に翻刻された『大唐西域記』、『酉陽雜俎』などに見えており、こ

の時期にある程度まで浸透していたと考えてよい。小説と原典との比較についてはこれまでに様々な角度から検討されており、その全てを具にふれる暇はないけれど、ここでは瘦せ馬に変わった父母が『校註国文叢書 今昔物語上巻』（博文館 大4）所収の「内記慶滋保胤出家語第三」からの取材であることをあらためて確認しておきたい。この逸話は「六の宮の姫君」（大11）にも採られたほか、同じ「本朝の部巻第九 本朝附仏法」には「往生絵巻」（大10）の原拠となった「讃岐国多度郡五位聞法師即出家語第十四」が載せられているところを見ると、この頃の創作動機的一端をうかがい知ることができるようである。

一方、作品の解釈をめぐっては、末尾の「人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」との言葉から正宗白鳥<sup>②</sup>が「かういふ程度の人間らしさに、作者は人間を見たつもりで、また自己を見たつもりで安んじてゐたのであるか。」としており、後に宮本顕治<sup>③</sup>によつて「いかに氏が一時代の一階級の道徳律を越えることの出来なかつたモラリストであつたかの証左となるであろう。」と断じられている。このような見方は、「童話なるが故に、平凡な人情、世間的な道徳に結末を求めてゐる。しかしそこに倫理的な龍之介の性格が窺はれるのである。現世を超越し切つた仙人として生きるよりは、泰山の南に、桃の花に囲まれた家で長閑に畑うつ方が、龍之介としても望ましい境涯<sup>④</sup>だつた」とする吉田精一<sup>⑤</sup>論とも関係的で、作品の持つ道徳観は作家の素養によつて支えられていると定められてきたのであつた。また、創作の内的動機が生母の発狂と初恋の破局にあつたとする村松定孝<sup>⑥</sup>論以降、たとえば三好行雄<sup>⑦</sup>によつて肉親愛の対象が子から母へ変えられている点<sup>⑧</sup>が、この頃までに母を作品に登場させていないことの理由であると指摘され、平岡敏夫<sup>⑨</sup>によつて「尾形了齋<sup>⑩</sup>覚え書」(大6)の「篠頸を抱」く描写と「馬の頸を抱」く描写とが共通して「秘められた、母を呼ぶ真実の声をききとること」ができる<sup>⑪</sup>と位置付けられている。

こうした評価の流れに対し、成瀬哲生<sup>⑫</sup>は作品の道徳観があくまで小説の技巧の上に語られることをして、作為そのものに芥川文学の本質があるとする。小説の構造(技巧)と内容(道徳観)を別個のものと考えず、むしろそうした表現に至つた経緯を積極的に認めていこうとする点は極めて重要な指摘である。ことに、「唐の都」を「洛陽」とする冒頭部分に対して「京都を洛陽と言ひ慣らわすようになった歴史」から検討を加え、これを「反リアリズム作家の真骨頂」とした点は出色であるといえるだろう。すでに指摘されているように、「杜子春」は「内記慶滋保胤出家語第三」をはじめとする古典群とも緊密な関係にあり、そのうちの「震旦隋代人得母成馬泣悲語第十七」は馬と父母という題材が用いられた応報譚であるばかりか「洛陽」であることの共通項も見える。また、慶滋保胤は「十訓抄」第十才芸を庶幾すべき事<sup>⑬</sup>にも間接的に登場し、その後段に出てくる峨眉山、すなわち普賢菩薩の存在に重きを置けば、「杜子春」作中における「月」と「北斗の星」は作品解釈の鍵となるに違いない。そこには唐代の伝奇小説『枕中記』(沈既濟)の故事「邯鄲の枕」や詩の典拠である「呂洞賓三醉岳陽樓」の影響も見え、北斗七星を神格化した妙見菩薩への信仰を交点として芥川の思想的原点とも重なり合うようである。本稿では以

下こうした視点から論じるものとし、本文引用は『芥川龍之介全集 第一巻』（岩波書店 昭52）に拠って旧字は適宜改めた。

### 一 都としての「洛陽」

隋の二代皇帝煬帝が高句麗遠征の失敗により失脚し、太原の李淵父子によって皇子代王侑が擁立されたが、しかし間もなく煬帝が謀反に遭って弑逆されると、恭帝から禪讓を受けた李淵が唐朝初代皇帝の座に就くことになる。以後、唐は二〇世三〇〇年にわたる繁栄を極め、最盛期には中央アジアも支配するほどの勢力を誇ったのだった。唐は首都を長安に置き、洛陽と太原はそれぞれ東都、北都である。前出村松に指摘のあるように、『醒世恒言』には表題に「長安」であることが明示され、『太平広記』、『唐人説薈』、『五朝小説』、『古今説海』、『竜威秘書』中の『続玄怪録』「杜子春伝」はいずれも「長安」の話として作られている。初出「杜子春」ではこれらに倣って「唐の都」は「長安」とされたものの、『夜来の花』収録の際に「洛陽」へと書き換えられ、それ以後は主人公の杜子春が「唐の都洛陽の門の下」でぼんやり空を眺めていることによって物語が成立することになっている。

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ盡して、その日暮しにも困るくらい、憐な身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といへば、天下に並ぶもののない、繁盛を極めた都ですから、往來にはまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。

洛陽に都がおかれていたのは東周（前七七〇—前二五六）、後漢（二五—一九〇）、西晋（二六五—三一六）のいずれかであるから、これが単なる記憶違いでなければ意図的な仕掛けということになるだろう。初出文に「これは杜子春の名はあつても、名高い杜子春伝とは所々、大分話が違つてゐます。」、河西信三宛書簡（昭和二年二月三日付、以下書簡と略記）にも「拙作『杜子春』は唐の小説杜子春伝の主人公を用ひをり候へども、話は2/3以上創作に有之候。」とあり、作品の創作性については作者自身も認めるところである。

また、作中に登場する鉄冠子については「三国時代の左慈と

申す仙人の道号に有之候。」「三国時代には候へども、何しろ長生不死の仙人故、唐代に出没致すも差支へなかるべく候。「書簡」とも述べており、時代考証については判然としないところがある。鉄冠子が詠じる漢詩にいたっては「(三)のしまひにある七言絶句は、呂洞賓の詩を用いました。少年少女の読者諸君には、『ちんぷいぷいごよの御室』と同じやうに思つて貰ひたいのです。」(初出文)、「年少の生徒には字義などを御説明に及ばざる乎。」(書簡)とされているから、年少の読者に対しては大きな問題として設定されていなかった可能性もある。しかし、翻つていえば年長の読者(?)についてはその限りではないのであり、そのあたりに異なる理由もあったのではなかったらうか。

大塚繁樹<sup>⑩</sup>によると、「洛陽」への書き換えは日本人にとつて繁華な感じを与えるようになっているといふことであり、本文の叙述に沿つた理解が取られている。陳舜臣<sup>⑪</sup>も都を「洛陽」としたことは「大した意味はない」としつつ、「場所の設定まで種本どおりにするのが面白くなかつたのかもしれない。あるいは、洛陽のほうが長安よりも、なんとなく優雅であると感じたのかもしれない。」と論じている。他にも、芥川にとつて出身地である東京を長安と見立て、当時の寓居である鎌倉を

洛陽に見立てる説<sup>⑫</sup>などもあるが、これらに対し成瀬は「京都を洛陽と言ひ慣らわすようになった歴史」(前掲、以下同じ)を起点に検討しており、そこには地名の語感に留まらない重要な示唆を含んでいる。この点については後述することとし、ここでは「内記慶滋保胤出家語第三」をはじめとする古典群を迂回してこの問題を検討してみよう。

「内記慶滋保胤出家語第三」は平安時代中期の儒学者で陰陽家の丹波権介賀茂忠行の子、保胤にまつわる逸話である。保胤は息子忠順の成人を見届けた後に出家して寂心と名乗り、播磨国に下ることとなるが、六条院のお召しに応じる際に舎人男がなかなか進まない馬の尻を打つ場面で次のようにある。

馬より踊り下て、舎人の男に取り懸りて云く、「汝は何に思て、此る態をば為るぞ。此の老法師の乗り進れば、蔑(あなづ)りて此くは打ち進るか。此れは、前の世より、絡(く)返し絡返し父母と成り在す馬には非ずや。汝ち、当時の父母には非ずと思て、此く蔑り進るか。汝にも、絡返し父母と成て、汝を悲びしに依て、此く獸と成り、亦、若干の地獄・餓鬼の道にも墮て、苦を受るには非ずや。」

『校註国文叢書』の頭注にはこれらのことが死生輪廻の義を含むものと説明され、子どもへの憐れみと愛情のために父母が馬となつて地獄に落ちて苦しみを受けているという筋に仕立てられている。そのため、それを知らずに馬を打つ舎人男を戒める逸話ということになるのだが、このような因果応報譚は他の『今昔物語』の逸話に多く見られる典型の一つである。

「六の宮の姫君」ではこの保胤が物語の最終盤に登場し、悲劇的な死を迎えた姫君を「あれは極楽も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂」だと語る場面がある。作品については「六の宮の姫君の如きを憐むべしと致し候」（大正十一年七月三十日付渡邊庫輔宛書簡）、あるいは「作者はその短篇の中に意気地のないお姫様を罵つてゐる」（『文放古』大13）とした言葉に沿つて後ろ向きな評価が取られることが多く、保胤についても「六の宮の姫君の哀れな人生を美的な文章で同情的に描き、死してもなおも中有に迷う姫君の靈魂に呼びかける形で高名な実在の慶滋保胤を登場させることで、哀れな六の宮の姫君の存在に現実性を持たせたのである。」とした理解に留められている。しかし、そこに見てきたような因果が含まれていることを勘案すると、そうとはかりともいえない。というのも、『今昔物語』では馬と父母という題材が「震旦隋代人得母成馬泣悲語第

十七」にも見え、これは母親が生前息子の米五升を娘に与えたために死後馬の身を受けて弁償する話である。むしろこれは罪報にまつわる応報譚ではあるが、一方で米を娘に与えざるを得なかつた事情や娘が母の傷を見て経緯を知り、兄と共に泣き悲しむ姿からは子への愛情や母への憐憫の情を看取することができる。つまり、応報譚として戒める心の奥底には仏教的価値観にまつわる慈悲の念があつたのであり、その意味において「内記慶滋保胤出家語第三」と相似形をなしているのである。

この母に龍之介の実母フクが存在を写し見ることもあるいは可能な事柄かもしれないけれど、ここで考慮したいのはこの逸話が母の前世と馬が接続されているばかりでなく、「今昔物語」震旦ノ隋ノ大業ノ代ニ、洛陽ニ一人ノ人有ケリ。」と「洛陽」が舞台とされている点である。震旦にまつわる話をまとめた『今昔物語』巻九のうち、「洛陽」はわずかに「河南元大宝死報告張叔冊夢語第十五」に見えるばかりで、また内容的に重なるどころがない。それに対し、実際に唐の都である「長安」は「震旦長安人女子死成羊告客語第十九」をはじめとして他の巻にも数多く見えているものの、内容的に「杜子春」との関係を確認することまでは難しい。したがって、馬にまつわる因果応報であること、かつまたその舞台が「洛陽」であることの二点におい

て「震旦隋代人得母成馬泣悲語第十七」は「杜子春」理解に対して特別な位置を占めているのであり、言い換えれば小説の舞台が事実に対して「唐の都洛陽」となることよって日本の古典群と通ってくるのである。

## 二 普賢菩薩と月の象徴性

さて、保胤は『十訓抄』「第十才芸を庶幾すべき事」に間接的に登場し、大江定基との関わりを介してより広範な影響関係を認めることができる。参議大江齊光の子定基は、三河守として赴任する際に連れて行った女が亡くなったことから永延二(九八八)年に寂心のもとで出家。以後、寂昭(寂照とも)と称して叡山三千坊の一つ如意輪寺に居住し、横川で源信に天台教学を学んだと伝えられている。源信は「地獄変」(大7)に登場する横川の僧都のモデルとされる人物であり、芥川の理解の範疇にあったことは間違いないが、『十訓抄』と同様の逸話が『校註国文叢書』所収の『古今著聞集』巻五に取られているほか、『今昔物語』の「参河守大江定基出家語第二」にも収められている。しかも、この話は「内記慶滋保胤出家語第三」、「六宮姫君夫出家語第五」と連続して載せられており、芥川の目に

ふれていた可能性は極めて高い。

さらに興味深いのは、『十訓抄』の後段には「ある説にいはく、この人は唐土の峨眉山に、寂昭といひける聖の後身なり。」とあり、中国三大霊山や中国四大仏教名山に数えられる峨眉山に言及されていることである。「杜子春」の鉄冠子は峨眉山の仙人とされており、原典で華山とあったことからの書き換えの理由は、成瀬によれば『三国志演義』における左慈の修行場所であったことに拠るのだという。また、大塚は華山が峨眉山に改められたことよって「日本人に親しみ易くなったが、仙境という感じは薄れている。」(前掲)と指摘しているけれど、峨眉山がとりわけ普賢菩薩の霊場として信仰されたことを加味すれば、また別の評価が適うようでもある。

拙稿「芥川龍之介『鼻』に関する予備的考察」<sup>[4]</sup>でも述べたように、芥川が「一人の無名作家」(大15)でふれていた『平家物語 灌頂卷』「大原御幸」には「障子には、諸経の要文共、色紙にかいて、所々におされたり。そのなかに大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけむ、『笙歌遥聞孤雲上、聖衆来迎落日前』ともか、れたり。」とあり、この一首は『十訓抄』では保胤の作ともされている。つまり、「内記慶滋保胤出家語第三」は父母と馬を結び付ける因果応報譚としての重要性のみならず

ず、保胤を媒介に普賢を導出する要素なのである。また、普賢は薬師十二神将の真達羅大将の本地であり、仏教では天竜八部衆に緊那羅として取り入れられている。これはもともとインド神話に登場する音楽神のことで、女性の緊那羅は半人半鳥、男性の緊那羅は半人半馬の姿をしているともいわれているから、それ以前の思想的背景としても興味深い事象である。

先の拙論では「菩提心論」に拠って普賢の大菩提心があたかも満月の光のように何ものも区別しないこと、そして仏による救済は衆生が知らないでいたとしても厳然と実在することなどを指摘しているが、「杜子春」においてもやはり月は特別な役割を担っている。「一」に「細い月」、「空の月の色は前よりも猶白くなつて」、「三」に「ほそほそと霞を破つてある三日月の光」とあり、財産を使い果たした杜子春がぼんやりと眺める空に浮かんでいることになつてゐる。杜子春の破産はいわば自業自得の結果であり、同情の余地はないようにも思えるが、それでも月は変わらず夕空から見守り、救済に導くように輝いているのである。同様のモチーフは「鼻」(大6)や「白」(大12)における月にも見出すことができるけれど、「杜子春」の場合には黄色く見える夜の月ではなく、それ以前の「日暮れ」に近い時間帯の月である。また、季節でいえば白い月には冬の寒々し

いイメージが付与され、三日月についてもどちらかといえば秋に連想されることが多い。ただ、「ぼんやり」している様や「ほそほそと霞を破つてゐる」様子からは、やはり春の臘月の方が適当であるといえ、それは普賢が中台八葉院で南東を守護することから五行思想では木気、季節的には春に対応することに由来するものと思われる。

「一」と「三」以外の箇所にも月の描写がないのは、「二」が洛陽一、天下一の金持ちになつて散財するまでのそれぞれ「三年」が説明されていること、「四」が地獄の底に行く契機となる峨眉山、「五」が地獄の底の描写のためと思われる。そして、「六」の「白い三日月」は物語の基本的構造をもつとも明快に示している。

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

こうした描写は、その素地に唐代の伝奇小説『枕中記』(沈既濟)の故事「邯鄲の枕」があることを容易に想像させる。志

開元七（七一七）年、邯鄲近くの宿で休憩していた導士の呂翁は山東の青年盧生と出会い、その貧しい身の上と立身出世が叶わない嘆きを聞くことになる。呂翁は袋の中から枕を取り出し、この枕で寝れば思い通りの榮耀榮華を与えると告げると、盧生が横になるやいなや枕の両端に空いた穴が段々と大きくなり、中が明るくなつていった。盧生がその中に身体ごと入ってみれば、はたして自分の家に辿り着いたのだった。盧生はその後名門の令嬢を娶り、科挙に及第して官界で出世すると、五十余年後には宰相の位に就いて一族も繁栄した。やがて八十歳を越え、天寿を全うしたところで目が覚めると、盧生はまだ宿の店先において、宿の主人が炊いていた黍も炊き上がらずに全ては元のままである。思い通りの榮華が束の間の夢であったことを驚く盧生に、呂翁は人生の満足とはこんなものであると説き、盧生は己の欲望を塞ぐ方法を教わった礼を丁寧申し述べて去つていったのだった。

この逸話は『太平広記』にも見え、明代には戯曲「邯鄲記」が生まれるが、日本でも『太平記』巻二十五に伝わって謡曲「邯鄲」が作り出されることになる。芥川にはこれを下敷きとした小説「黄粱夢」（大6）があり、「死ぬのだと思つた」盧生が目覚ますと枕元には依然として呂翁が坐つていて、主人の炊い

ていた黍も未だ熟さず「邯鄲の秋の午後」は落葉した木々の梢を照らす日の光があつてもうすら寒かつた、という結構に仕立てられている。これらの逸話では時間の経過がないことが黄粱によつて示されるのに対して、「杜子春」ではその役割を月が担っており、作品構造を考えていく上で重要な視点となるだろう。

満ち欠けをくり返しながら、しかし常に夜空に輝く月は古くから不死あるいは再生の象徴として語られ、夜を続ける神としても崇められてきた。『古事記』と『日本書紀』においては伊邪那岐命によつて生み出された月読命として登場し、これは天照大神の弟、須佐之男命の兄にあたる神である。『古事記』では黄泉国から逃げ帰つた伊邪那岐命が禊ぎをした際に右目から生まれ、もう片方の目からは天照大神、鼻からは須佐之男命が生まれたということになっており、中国神話における天地開闢の神盤古の伝説とほぼ同型である。また、『万葉集』（巻十、三三二四五）には月読命が持つ若返りの霊水が詠み込まれているけれど、中国では同様のモチーフが『淮南子』覽冥訓に西王母の逸話として残されており、仙女だった嫦娥が地上に下りて不死でなくなつたために夫の後羿が西王母からもらい受けた不死の薬を盗み飲んで月（広寒宮、月宮殿とも）に逃げたという筋である。このような前後関係からすれば、月の存在は杜子春

が同じ状況をくり返す場面や束の間の不変を示すのにもっとも適しているといつてよいだろう。なお、同じく西王母の登場する『西遊記』では、猪八戒（天蓬元帥）が広寒宮で酔つて嫦娥に言い寄つた罪で地上に落されることにもなつており、そこに分ちがたい結びつきを見ることができ、芥川は「愛読書の印象」（大9）では「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は、西洋には一つもないであらうと思ふ。」とも記しているから、これらについては充分な理解を背景として構想されたと見てよさそうである。

### 三 「北斗の星」と妙見信仰

ところで、作中月とともに象徴的にあらわれるのが「北斗の星」であり、これは月の描写のない「四」に三度登場するなど、その特徴を際立たせている。一度目の登場は杜子春と鉄冠子が峨眉山に赴いた場面で、「よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてゐました。」と洛陽からの場面転換や場所の様子を示している。また、二度目は峨眉山到着後の場面で登場し、鉄冠子が不在の間に魔性が現れ

ても声を出してはいけなさと告げていなくなると、はたして空中から虎や白蛇が現れ、雷が轟くなどするが、杜子春が眼を開いて見ると空は以前の通り晴れ渡つていて「向こうに聳えた山山の上にも、茶碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いて」いるのだつた。こうした描写は先の「邯鄲の枕」を思わせるところもあるけれど、「厳かな神将」が現れるとその状況はにわかに一変することになる。

神将はかう喚くが早い、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。さうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のやうに消え失せた後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせてゐます。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

「邯鄲の枕」の定型からいへば、夢から覚め全てが元通りとなる場面で黄梁が未だ炊けていないのであるから、ここでの描

写はそれには該当しない。そうした役割はやはり月が担っているものであり、「北斗の星」にはそれとはまた別の意味が課せられているようである。

茶碗程の大きさに光る「北斗の星」とは、一般に見れば単体の星として北極星のことを指すと思われるが、しかし北極星と北斗七星は歴史的にしばしば混同され、同一視されることがあるために注意が必要である。北極星は古くから方角を知るための指針であり、古代中国では北辰とも呼ばれて天帝太一神が座していると考えられた。道教ではこれを神格化した北極紫微大帝が最高神として崇められ、その居所紫微宮に由来する紫色は高貴な色として漢の武帝によって禁色とされている。また、北斗七星は北極星を周回することから天帝の乗り物として見立てられ、生死禍福を司る神として信仰された。『封神演義』、『三國志演義』にそれぞれ延命祈願に関する記述が見えており、七世紀中頃には「北斗七星護摩秘要儀軌」や「仏説北斗七星延命經」などが翻訳されているから、このような信仰がすでに広く定着していたことがうかがえる。そうなれば、散財した杜子春が西の門の下に立ち尽くす場面に月が輝き、息絶えて地獄の底に下りる直前の「四」に「北斗の星」が輝くのは自明のこと、そこには再生と死のモチーフが示唆されているのである。

なお、仏教では道教と習合し、北極星と北斗七星を神格化した妙見大菩薩が信仰されるようになる。早い資料としては『続日本紀』の宝龜八(七七七)年に「妙見寺へ美濃国勝田郡、上野国群馬郡戸五十畑を寄進す」との記述があり、平将門の乱で追い込まれた平良文が不思議な声に導かれて当地へ辿り着き、僧から手渡された七星剣によって妙見菩薩の加護を受けるようになったとされている。妙見菩薩の靈異を示す説話は『日本靈異記』にも数多く記されているが、小村純江〔註〕によると奈良・平安の頃には公家の間で護国の仏神として、武士が台頭した後には守護神として信仰されるようになったといい、大内氏や千葉氏などに家門の延命存続として顕著な事例があるとの報告もある<sup>18)</sup>。

芥川の信仰した日蓮宗にも妙見信仰があり、日蓮聖人が伊勢の常明寺に滞在した際に妙見大菩薩が示現されて北辰を感得したということである(『神道史大辞典』)。また、芥川の随筆「本所両国」(昭2)の「柳島」に記述のある柳嶋妙見山法性寺は明応元(一四九二)年に法性房日過上人によって開山され、かつて葛飾北斎が信仰を寄せた寺としても知られている。当初は出生地である「葛飾」を名乗っていた北斎が「北斎辰政」と改めたのはこの妙見信仰のためで、法性寺の妙見堂を題材とした「柳嶋妙見堂」、「妙見宮」などの作品も残されている。芥川は

「骨董羹―寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文―」（大9）の中で北斎にふれており、その相応な理解をここに求める限り、「杜子春」における「北斗の星」についても関連性を示す根拠となり得るだろう。

ところで、妙見菩薩は手に太刀を持った姿で描かれることが多く、日蓮宗では剣を地に立てる立像と受け太刀の座像（能勢型）の二形態が伝えられている。このうちの立像は、紂王の無道によって陰界の秩序が乱れた際に玄天上帝が下つて妖魔を討伐したという故事（『神仙通鑑』）に因るもので、この時魔王は青亀と蛇に変身したために、以後の妙見菩薩は白蛇を体に巻きつけた状態で岩上の青亀の上に立ち、剣を地に立てて睨みをきかしている姿と考えられた。こうした亀と蛇が絡み合う姿を「玄武」といい、北の方位神として祀られてゆくことになるが、そこで思い出されるのが成瀬論で示された〈洛陽〓京都〉という構図である。周知のように平安京では長安をモデルに条坊制が採られ、長安城になぞらえた右京が早くに衰退する一方で、洛陽城になぞらえた左京が発展したために洛陽が平安京の代名詞となった。のみならず、北辰信仰の影響から唐で採られた北闕制も同時に受け継がれ、北方の守護神として妙見菩薩が鎮護国家の守り本尊とされたのである。平安時代には御所の紫宸殿を

中心に十二支の方角に妙見菩薩を祀り、江戸時代中頃にはこの妙見宮をめぐって厄除け祈願する「洛陽十二支妙見めぐり」が流行したことなどを併せ考えれば、〈京都〓洛陽〉という構図の中に妙見信仰は欠かすことのできない存在ということができ。都が「長安」ではなく「洛陽」であることの意義は、この点にあるといつて過言でない。

ちなみに、洛陽十二支妙見のうちの一つ京都市左京区岡崎の満願寺は芥川文学とも所縁が深く、もしかするとより多面的な評価を加えることができるかもしれない。満願寺は十二支妙見のうちでも龍之介の名付けに由来した辰の方角にあたることもとより、俊寛僧都が執行を務めた法勝寺の跡地に所在していることでも知られている。「俊寛」（大10）についてはすでに前稿で『平家物語』および竜神八部との関連でふれているけれど、作中には高平太が自分を憎み内心恐れているとする場面で自分は前の法勝寺の執行であると直接に述べるところがあり、作品の内外で密接な結びつきをもっていたものと思われる。詳しくは今後の課題である。

なお、妙見菩薩の剣には破邪顕正（邪な考えを破って顕正する力）が備わっているとされており、福永光司<sup>19</sup>によれば剣の霊威を占星術的な天文学に根拠付けるものは四天王寺の七星剣、

法隆寺金堂の金銅製の剣などにも見えるという。こうした指摘は「杜子春」における「北斗の星」の位置付けを考える上で示唆的で、その予兆が鉄冠子の詠じた詩に見えている。この詩の直接の典拠となった馬致遠の元曲「呂洞賓三酔岳陽樓」では呂洞賓が郭馬児に贈った剣にこの詩が書いていることになっており、そのうちの第二句「青蛇」について成瀬は「従来の解説注釈等が『青蛇』を「あおへび」と字面通りに介しているのは、誤りである。」とした上でこれを剣の暗喩と定め、「呂洞賓という仙人とつて剣は呪術的力の根源であり、道教神としての彼のシンボルである」とする。蛇と剣とが思想的に結びつくのは玄天上帝の故事以来のことでもあるが、福永によれば前漢の高祖劉邦が用いた斬蛇の剣は漢代の神剣・宝剣思想の中で皇帝権力の象徴という重要な意味を持っていたということである。もちろん、宋や元の時代にはすでにそうした意味合いも薄れつつあったに違いないけれど、しかし蛇が剣の暗喩であったこと自体に疑いを入れる余地はないだろう。

「呂洞賓三酔岳陽樓」第二折では、得道を勧める呂洞賓に対して世俗への思いを断ちがたい郭馬児がこれを受け入れず、呂洞賓は郭馬児に妻を殺して自分と一緒に行くよう勧めて剣を与えることになる。この剣に先の詩が書いてあったのであるから、

「杜子春」においては懐に忍ばせた剣によって気持ちを断ち切ること、すなわち俗世への思いを断ち切り、仙人修行への専念を意味していることになるだろう。第三折で呂洞賓が術策によって妻が殺されたと見せかけ、その罪を郭馬児にかぶせて世のはかなさを思い知らせるといふ構図は「杜子春」では地獄の場面、ことに杜子春が黙ったままであったなら殺してしまおうと思ったとする鉄冠子に引き継がれ、物語構造としてほぼそのままの形で見出すことができる。畢竟、「地上から天上への上昇に代えて、天上から地上への下降を選ぶ」モチーフ（前掲三好）を完結させるためだけにこの詩があったのではなく、「呂洞賓三酔岳陽樓」の物語形式や内容を正しく踏襲していたのである。いかに表層的に「童話に対して中国的情趣を添える結果」（大塚）となっていたとしても、作中に再生の象徴である月とその対をなす「北斗の星」とが強調され、そこに妙見信仰を通して暗示される剣の意味が交差しているのだとすれば、少なくとも少年少女の読者に対する見せかけ以上には重い意味があったはずなのだ。もちろん、杜子春に妻はなく、最終的に人間であることを選択しているために郭馬児と全く同じと見なすことはできないけれど、むしろそうした逆転の結末に芥川の創作を見出すことができるのである。「通俗的モラルをテーマにした、

悪く言えば騙」「知っている作者が知らない読者をたぶらかす」(成瀬) 作品といえなくもない。しかしまた、我々が物事を知ることによって得られるものは殊の外多いのではないだろうか。

### まとめ

「杜子春」は他の芥川作品と同じく多くの言及があつたにも関わらず、そのほとんどが童話としての結構や応報譚の中に母の姿を見出すに留まり、物語の構造や詩の意味するところを見逃してきた。成瀬の説く(洛陽Ⅱ京都)の構図が注目されるのは、「内記慶滋保胤出家語第三」をはじめとした日本の古典群との架橋を可能とするため、そうしてはじめて「杜子春」の新たな解釈の道が模索される。その端的なあらわれが都としての「洛陽」なのであり、「震旦隋代人得母成馬泣悲語第十七」で示された保胤を介して『十訓抄』第十才芸を庶幾すべき事と接続することで、峨眉山および普賢菩薩の重要性が浮かび上がる。その結果として得られる月の象徴性は「北斗の星」と対をなすことによって意味を形成し、妙見菩薩や剣の存在を介して作中に引用された詩のあり方を暗示するのである。なお、この詩の典拠となつた「呂洞賓三醉岳陽樓」については、「脉望

館本」および臧晋叔校「元曲選」という二つの系統が残されており、このうち後者は芥川が実際に蔵書したものである。だから、この引用がいかにか作家の漢詩趣味に支えられたものであつたとしても、十分な理解のもとに構想されたというべきで、そこにこそ原典から離れた小説独自の世界が成立する。いわば「洛陽」を鍵語とし、日中の神話や古典を往還することによって作品の可能性が拓かれるのである。

### 註

- (1) 芥川が参照したとされる『校註国文叢書』所収『今昔物語』(上下巻 博文館 大4)には採録されていない逸話もあり、その場合には『日本古典文学大系 今昔物語集』(岩波書店 昭35)を補完的に使用した。前者は特に『校註国文叢書』と記し、区別することとする。
- (2) 正宗白鳥「芥川龍之介氏の文学を論ず」(『中央公論』昭和二年十月号 昭2)
- (3) 宮本顕治「敗北の文学——芥川龍之介氏の文学について——」(『新日本出版社』昭50)
- (4) 吉田精一「芥川龍之介」(三省堂 昭17)
- (5) 村松定孝「唐代小説『杜子春伝』と芥川の童話『杜子春』の発想の相違点」(『比較文学』八巻 昭40)
- (6) 三好行雄「御伽話の世界で」(原題「芥川龍之介解説」、『日本児童文学大系 第十二巻』ほるぶ出版 昭52所収。本文は『三好行雄著作

集 第三卷 芥川龍之介論 筑摩書房 平5から引用)

- (7) 平岡敏夫『芥川龍之介——抒情の美学——』(大修館書店 昭57)
- (8) 成瀬哲生『芥川龍之介の「杜子春」——鉄冠子七絶考——』(徳島大学国語国文学) 二巻 平元)
- (9) 『新編日本古典文学全集 十訓抄』(小学館 平9)
- (10) 大塚繁樹『杜子春伝と芥川の杜子春との史的関係』(『愛媛大学紀要』第六巻一号 昭35)
- (11) 陳舜臣『二つの杜子春』(『オール読物』昭和四十七年一月号 昭47)
- (12) 松本寧至『蜘蛛の糸』から『杜子春』へ——芥川龍之介の童話——』(『松學舎大學東洋學研究所集刊』第三二集 平13)
- (13) 小澤保博『芥川龍之介『六の宮の姫君』考』(『琉球大学教育学部紀要』六九号 平18)
- (14) 拙稿『芥川龍之介『鼻』に関する予備的考察』(『國學院雜誌』一二五巻七号 令6)
- (15) 『日本古典文学大系33 平家物語 下』(岩波書店 昭34)
- (16) 基本的な理解については『佛敎語大事典』(東京書籍 昭56) 其他を参照した。
- (17) 小村純江『民俗学的視点からみた鎌倉地域の妙見——鎌倉幕府で行われた北斗法と鎌倉地域の安倍晴明の軌跡——』(『常民文化研究』第二巻 令5)
- (18) 平頼直樹『室町期における大内氏の妙見信仰と祖先伝説』(史学研究会誌『史林』九七巻五号 平26)
- (19) 福永光司『道敎思想史研究』(岩波書店 昭62)
- (20) 『芥川龍之介文庫目録 増補改訂版』(日本近代文学館 令5)